

日韓合同授業研究会会報

第 107 号

2017年2月20日発行

2017年1月に思う

「ポスト真実」の嵐の中でも真実に生きるには？

川辺

私の、今年の年賀状は、「私たちが生きる2017年の世界は危ない淵に立ち、巨大な渦を巻いている気配を感じます。素晴らしい人々に出会えたことに感謝すると共に、許し難い悪やウソに負けぬよう、学び、力を合わせていきたい思いです。今年もよろしくお祈りします。」というものだった。

私も賛助会員になっているNPO法人「輝く未来の風」（自然エネルギーの推進、原子力発電に反対）の会報「風神だより」（12月26日発行）のコラムに『POST TRUTHとは』というコラムがあった。長くなるが、深く共感したので引用したい。

【英オックスフォード大学は、今年の注目を集めた言葉として「客観的な事実や真実が重視されない時代」を意味する「ポスト真実」(POST TRUTH)を選んだ。事実に基づかない、ウソで人々を扇動し、あるいは人々が扇動されてしまう政治手法や風潮を示す言葉である。世論を形成するために客観的事実より、個人の感情に訴えるほうが影響力をもつ「土壌」(「」は筆者)が、現在の社会にあることが背景にある。(中略)

ウソ情報で始まったイラク(筆者)戦争は10年余り続き多くの死者や犠牲者を生み、幾多の悲劇が起きた。ウソをでっち上げ、そのウソで始まった戦争に熱狂した人は今何を思うか。そして殺された人の無念さは計り知れない。

原発は安全で事故など起きないと言ったが、史上最悪の事故が起き、いまだに収拾の目途も立っていないのに、「アンダーコントロール」と言い放つ。安い安いと言いながら、福島原発処理に30兆円(英廃炉例で試算・筆者)かかり、そのツケを国民に回す。

公共放送、テレビや大新聞と政治権力が戦前と同様に一体化し、メディアの商業主義が跋扈して、世論形成を図る。事実を軽視して人々の感情に訴えることが上手な大統領(次期)や首相や知事がいることをしっかりと肝に銘じたい。】

目次

2017年1月に思う	1
本紹介 青木理『安倍三代』	3
アイヌモシリに行こう	4
離任にあたって	6
昌寧古墳出土の冠帽について	7
短信	8

「事実を軽視」どころか「不都合な真実を無視」している。そして、ヘイトスピーチを大国の、大国をめざす政治家が繰り返している。このことは、本会報第106号の「メディアのコントロールに抗し、多様性をマジで考える。トランプの出現、大連訪問そして教育の行方」でも、チョムスキーの警告としてメディアコントロールを紹介している。

情報操作の中で日々生活しなければならない日常の居心地の悪さ・ストレスは大きい。NHKのニュースを聞く度に、耳を塞ぎたくなるような衝動に駆られる時がある。あまりに一方的な歴史認識と情報操作。それが年賀状の私の思いだった。この思いは多くの人が持っていたことが分かったが情報操作を受け入れる「土壌」改良となると、簡単なことではない。無自覚に、大声のウソに流されるのは今に始まったことではない。こういう私も、第二次世界大戦、アジア・太平洋戦争の戦後という時代を丸ごと、ノ一天氣に、気楽に、生きてきたと思う。冷戦という仕組みの中の米軍基地の存在・沖縄支配、「きれいな、効率よい、平和利用の」原子力発電利用、高度成長経済の裏で進んだ公害病・水俣病……。今頃、その重大さに、気がついた。

以前、「見ざる、聞かざる、言わざる」の逆を進めて、文科省の進める「道徳」の教科化・評価に反対していきたいと書いた。一昨年はその中で「聞く」、相手が言おうとすることにまず耳を傾ける、「受信体」としての自己を自覚したいと思った。しかし、本当に聞きたい、体験者の、真実の声の音量は微かで、政権の音量ばかり浴びせられているように感じていた。真実の声が聴き取れる、発信できるまでには何十年という年月がかかっていることは、さまざまな方が語っている。(石牟礼道子、スベトラーナ・アレクシエービッチ 他各氏)

次に私が気になる事実の無視、歴史の無視について触れる。「第一次世界大戦」についてである。この戦争は、第2次産業革命による技術の高度化の中で、帝国主義列強の世界分割戦争として始まったが、兵器の高度化は、戦争そのものの残酷な事実を突き付けた。毒ガス・飛行機・戦車・機関銃によって、敵・味方とも殺傷の規模・深さは衝撃的であった。総力戦となり、4つの帝国が崩壊した。オスマントルコ帝国、オーストリア・ハンガリー帝国、ドイツ帝国、ロシア帝国。ロシアに社会主義革命が起き、アメリカはウイルソン大統領が、講和の原則として「14カ条」を発表した。その中には、「植民地問題の公正な解決」もあった。日本は、日英同盟により戦勝国の一員となり、資本主義列強の仲間入りしたと得意になった。しかし、ヨーロッパを舞台にしたこの戦争の「戦場の悲惨さ」と、そこから生まれた「平和への希求の強さ」を認識しなかった。日清戦争、日露戦争も戦争の実態を知らされず、「勝った」「勝った」と調子に乗った。第一次世界大戦の実態もさらに知らずに近代「官僚・軍事国家」の道を歩んでいく。近代国家への道に苦しんでいるアジア諸国は、必死の思いで世界の動向に注目し希望を見つけようとして「三・一運動」「五・四運動」などを生み出した。こうした動きに目をそむけ、資源獲得と大国への野望に国民を投入した。アジア・太平洋戦争、第二次世界大戦を起こし、300万余の自国民の死者と国土の荒廃、その前に、アジア諸国には何倍もの死者と荒廃という結果をもたらした。アメリカは自国兵士を守るため、社会主義ソ連に対抗するため、原爆を投下した。ソ連は自国建設のため、戦後も日本兵をシベリアに抑留させた。敗戦国日本はポツダム宣言を受諾、大日本帝国ではなく日本国として再スタートした。そこで、手にしたのが「日本国憲法」である。70年後、それを否定して「誇らしい日本」を取り戻す、と動いているのが安倍政権だ。

3つ目に、地球環境と原発について触れる。熱い戦争に変わり、米ソ冷戦と局地戦争は続いてきた。最大の武器は核兵器、その開発競争が核実験となって地球を汚染し人々を被爆させた。平和利用だとして原子力発電所が建設されてきた。1954年ビキニ水爆実験、その後の10年間で1500回も米仏英が太平洋で、ソ中は内陸で実験を繰り返した。1979年には米・スリーマイル島、1986年にはソ・チェルノブイリで原発事故。そして、2011年3月11日、日・福島第1原発事故が起きた。

この事故から6年目を迎える現在、ますます、被害の大きさ・深さが明らかになってきた。事故費用は当初想定の2倍の21.5兆円となり、終わりのない時間が控えている。見えない放射線を可視化することで、放射線の汚染の実態を知らせようとする写真家と物理学者が共同で作った本の結びの言葉を紹介する。（「放射線像 放射線を可視化する」森敏、加賀谷雅道、皓星社）

【地殻変動（地震・津波・噴火）などの天変地異によるばかりでなく、多くはヒューマンエラーで原発事故は起こっている。今後も必ず起こるだろう。原発事故の起こる確率は100%。来たるべき次回の日本の再稼働原発や諸外国に全部で400基以上稼働しているといわれる原発の事故に備えるには、何がどれくらいどのように汚染するのかをビジュアルな映像として、世界の人々が頭の中に収蔵しておく必要がある。】

当事者である日本政府と電力会社は、一旦、停止していた原発の再稼働と輸出に今、熱心だ。ドイツ、ベトナム、台湾等は、原発に頼らない方向に舵を取ったが、中東諸国は原発ラッシュだという。2016年11月、地球温暖化を水際で食い止めるための新しいルール「パリ協定」が決まった。脱炭素社会をめざして「共通だが差異ある責任」を人類で負うことにした。安倍政権は、原発だけでなく、石炭火力発電所も各国にトップセールスをしている。太平洋の島々は生存の危機に直面し、自然に恵まれた日本でさえ異常気象を実感している。技術が高度化したからこそ、大量生産・大量消費・大量廃棄の成長・大国願望を脱して自然の息吹や人々の思いに耳を傾け、共存のリズムを作り出したい。政治家・官僚・財界・識者に任せずに、人のつながりや感性を大切にすることを願う。それには、私たち市民が自立し、情報の受け手・送り手として学び合う気持ちと努力が必要なのだろう。歴史の流れに生きる人間として、負の遺産を将来世代に残したくない。出来るだけきれいな地球、協力する地球を残したい。私は、15アンペア生活を工夫しながら取り組んでいる。

【本紹介】青木理『安倍三代』（2017年、朝日新聞出版）

ハンギョレ日本語版2017.2.8に青木理『安倍三代』が紹介されています。

青木理氏は韓国語も堪能なジャーナリストです。安倍首相とは何かを考えるとてもよい材料を提供してくれました。反骨の政治家、祖父安倍寛、山口県の在日コリアンと付き合いの深かった父安倍晋太郎。そして誰よりも尊敬する母方の祖父岸信介。安倍首相はこれらのDNAをどのように受け継いでいるのか。いないのか。夫人昭恵氏は「韓流」に関心が深い、安倍首相はどのようなのか。

雑誌『AERA』に連載された記事をまとめたのが本書です。韓国語版が発刊されることも期待します。

「結論からいうと、私は安倍首相が嫌いだ。しかし、ジャーナリストとして、事実として認めなければならない点がある。安倍首相は第1次政権では失敗したが、第2次からは執権5年目を迎えるまで支持率も50～60%前後を維持している。安倍政権を支持するかどうかにかかわらず、この政権が改憲まで狙う歴史的な政権であることは否定できない。このような状況で、ジャーナリストとして『安倍首相とは一体何者か』、『私たちはなぜ戦後70年にこのような政権を持つようになったのか』を取材して示さなければならないと思った。安倍首相はよく（母方の）祖父の岸信介を尊敬すると言うが、政治家としては祖父の安倍寛と父親の安倍晋太郎のルートに従った。だから「寛～晋太郎～晋三」これら3代をちゃんと描いてみたかった。



この過程を通じて戦後 70 年余り続いた日本の政治の大きな流れをつかむこともできると思う」

アイヌモシリに行こう

斉藤

はじめに

私は教員ではないので「日韓合同授業研究会」といっても、子どもは二人いるが既に成人していることもあり、私の興味は授業研究より交流会でのフィールドワークにある。モイムでも私が関心を持ち、注目する視点到違があることをしばしば感じる。

私は朝鮮人を父に、日本人を母として日本で生まれ、日本の公教育を受けて育った。私の歴史認識はその教育を土台にしたものだ。

私の両親は大阪で生まれ育ち、出会った。しかし、ともにそこでの家族からは祝福されず、その地を離れ新大久保で新たな生活を始めた。2 人は故郷から見放され、新たな地も故郷にはなり得なかった。私は新大久保で生まれ、川崎で育った。しかし、私にとっての故郷という意識は、それらの地に対して希薄だ。

1. 初めてのフィールドワーク

私が初めてフィールドワークと意識して行ったのは、研究者の山田さんの案内での埼玉県の関東大震災時朝鮮人虐殺現場だった。電車と徒歩で歩いた虐殺地 FW は、身体的にも精神的にも疲労を伴うものだった。群馬県高崎市倉賀野町に行った時のことだ。町にある九品寺墓地には 1 人の朝鮮人が埋葬されている。虐殺地からほんの歩いて 5 分足らずのところ、派出所がある。ひしひしと感じたその距離感。逃げて殺された朝鮮人と追って殺した日本人がそこにはいたのだ。

2016 年の交流会、千葉県八千代市での FW は改めてその場に行くことの怖さと、現実感があつた。八千代の高津観音寺からなぎの原まで歩きながら、この距離を、殺されるために歩かされた朝鮮人と、殺すために歩かせた日本人がともに、ここにもいたのだ。

私の父は 1925 年に大阪で生まれた。1923 年の関東大震災時に祖父が関東にいたら私はこの世に生れなかったかもしれない。関東大震災時の朝鮮人虐殺地の FW では必ず鳥肌が立つ。

FW に行くようになり、歴史の現場に立ち、自分が何を発見できるか、感じるか、自分が楽しみだ。自分を知ることができる。私にとっての FW は、故郷を探ることにつながる。私は旅をしながら、自分の居場所を探る。

2. すべてはフィールドワークだ

広島川の川に架かる橋に立った時のことだ。原爆で焼かれた人たちがこの川に入って死んでいった。焼かれた人々が助けを求め、水を求め、入っていった。私もきっとそうする。そうして死んでいったらろう。この川は幅が広く、そこに入ったら助かるかもしれない、きつとそう思う。

3. 沖縄にも行った。北海道にも行った。

沖縄と北海道はともに日本のツーリズムの目玉だ。海外からの旅行者も多い。沖縄へは美しい海、北海道へは雄大な自然を求めて私も行った。

最初に行った沖縄は、渡嘉敷島だ。海に入っても、足が見えない灰色の湘南の海しか知らなかった私には、予想にたがわぬ美しさだった。しかしその海は米軍の初上陸地だった。



北海道のイメージは、自然の美しさと雄大さなどで印象付けられている。私もその例にもれず、30年ほど前には2度ほどオートバイで北海道をまわった。初めて見る、地平線に沈む太陽に向かって走るその地は、予想にたがわぬ雄大さで美しかった。

しかし釧路で出会った人は言った「北海道の何がいいの。何かあったらすぐソ連が攻めてくるよ。」と。私が行ったのは1985年、86年、当時ソ連の崩壊など思いもよらない。

4. 行って みる

阿寒湖に行った時のことだ。“イチング（アイヌ語で亀の意）”という観光土産店に入った。北海道に行けば、必ず売っている観光土産の定番のような熊が鮭を口にくわえた彫り物や男女が寄り添った彫り物など、それらを店の主人は仕入れと言っていたが、それらとともに、主人と思しき男性が彫った、大きな木の像がところ狭しと置かれていた。北海道土産では見たこともないものばかりで魅了された。

その中に、手の中に入るアイヌの古老を刻んだものがあった。小さく、手ごろな値段だったので買い求めた。

アイヌの老人を彫っているというその男性は、私にはアイヌには見えなかった。

最近、友人が私に興味ありそうだからと貸してくれた本があった。その本は阿寒湖の店の主人の娘が書いたものだった。「民族衣装を着なかったアイヌー北の女から伝えられたことー」だ。その本からその男性のことを詳しく知ることとなった。店の主人は満州生まれで山梨に引き上げた和人とのことだった。

アイヌは多様なのだ。アイヌであろうとなかろうと、人間は多様なのだ。当たり前のことが、当たり前のこととして意識されるようになるのには何が必要か。

観光では知識は知識のままだ。フィールドワークに行くと、知識で知っていると思いついでいるものが体に刻みこまれる。

おわりに---アイヌモシリに行こう---

私はかつて北海道に行った。しかし、そこで私が見てきたものは、観光案内書で読んだ、観光資源として作られたイメ

ージにちりばめられた、私が見たかったものばかりだ。

アイヌモシリに行くことは、2016年度の関東大震災時朝鮮人虐殺現場のFWより過酷なものとなるのではないかと予想される。人々を故郷から切り離し、暮らしを破壊し、日本でどれだけの人が殺し、どれだけの人が殺されたかの現場に立つからである。観光的な側面は一切ない。私たちが学校教育下で教えられた歴史は権力が作った物語であり、私たちの歴史観はこの物語を土台にしている。権力は都合の悪い歴史は隠し、捏造し、いつわりがまかり通っているからである。

私たちが明らかにするべき歴史的事実は多い。

離任にあたって

千葉韓国教育院 院長 宋

2014年2月から2017年2月まで3年間千葉韓国教育院に派遣されました。韓国教育院とは何をするとところなのか?という質問を受けました。韓国教育院は在日韓国人2世に韓国語を教えるために設置されました。今、世界に39の韓国教育院があります。現在は在日韓国人よりも日本人が韓国語を学ぶことが多くなっています。国際的交流と行き来がより大きな比率を占めているといえます。日本に来て住んでみて改めて感じるのは、日本の国土が広いことです。私が住む千葉県も都市と農村が共存する地域です。さらに関東地方の平野地帯は電車に1時間以上乗っても山が見えません。気候は典型的な海洋性気候です。東側に太平洋があるので冬も雪がほとんど降りませんが、強い風が吹きます。大陸性気候の影響を受ける韓国とは根本的に異なります。空気も比較的きれいです。偏西風の影響により中国の公害物質にさらされている韓国より確実にPM2.5が少ないです。さらに地震さえ除けば、街の銭湯が温泉なのでとても過ごしやすいです。

都市の施設は少し古いという印象があります。そして交通費がとても高いということに驚きました。高速道路の通行料を大幅に値上げしても抗議する人がほとんどいません。移動費を高くすれば地域経済が活性化するといいます。韓国は商圏が大都市に集中しており、地方の商圏が微弱です。一方、日本を旅行してみると地域なりに商圏が形成されています。小さな部分まで配慮しながら地域の特色を打ち出す姿が見えました。さらに3代にわたって家業を継ぐ姿はよいことです。

人びとは自分のことをよくわきえています。よく挨拶をし、まず相手に譲る姿が身についています。小さい頃から秩序正しい教育を体系的に受けたという印象を持ちます。街は世界のどこよりも清潔です。交通秩序も整然としています。

しかし、世界には力によって平和が来ると信ずる人びとがたくさんいます。力による平和は力を持った者の平和だと思えます。真の平和は他人を人間として認めることが基礎になると思えます。したがって、韓国語を学ぶここ千葉地域の日本人の友人たちがどれほど大切なことでしょう。さらに日韓合同授業研究会のみなさんも!すでに隣国と交流しながらヒューマニズムを実践されています。みなさんの活動は卑劣な勢力を牽制しています。海を越えて人間を人間として認める活動であるだけに貴重に感じられるのです。みなさんは国境を越えて真に幅広くすばらしい生を発信しています。

みなさん、この3年間ありがとうございます。韓日合同教育研究会、日韓合同授業研究会のみなさん!みなさんは平和を実践しています。先が見えなくても屈せずお進みください。みなさんこそ希望です。私は帰国します。しかし、みなさんがいらっしゃるので心強く思います。ありがとうございました。

(訳：遠藤)

昌寧古墳出土の冠帽について

波多野



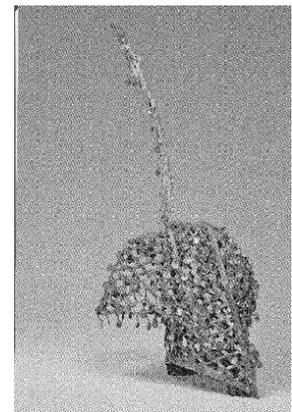
昨秋、慶尚南道の昌寧（チャンニョン）にある牛浦（ウッポ）沼を訪ねました。以前交流会のアフターでイさんが代表をつとめているトキの飼育を見学したことがありましたが、今回はガンやヘラサギなどの渡り鳥が見たかったのです。

ところでイさんがまず連れて行って見せてくれたのは、沼ではなくて古墳群でした。昌寧は周囲を 500～600 メートルの低い山で囲まれた盆地で、かつて伽耶諸国のうち非火（ピファ）国があったところだそうです。校洞・松岷洞・桂城の三つの古墳群があります。なだらかな丘陵に沿ってずらりと連なる円墳が 70 基あまり復元されているのも壮観ですが、地表調査によると 1,000 基あることが確認されているそうで、びっくりしました。当時はおそらく住みやすい豊かな土地で、この地の人びとは日本列島の人びとも行き来しながら親しくしていたのではないかと思われました。

ここから出土した遺物の一つが下の写真の「透彫冠帽」（6 世紀）です。実は以前イさんに東京国立博物館の東洋館にあるから一度見てこいと言われて見に行き、そこで買った絵葉書を持って行ったところ、かれはとても喜んで会う人ごとに（食堂のおばさんにまで！）見せてまわっていました。この実物を昌寧の人たちに見せて郷土の歴史を知らせたいというのがかれの願いです。

これが東京国立博物館にある理由は、植民地時代に大邱（テグ）で電力会社を経営していた小倉武之助（1870－1964）のコレクションだったものを遺族が寄贈したからで、現在は日本の重要文化財になっています。昌寧の古墳群は、1909 年関野貞（ただし）が大韓帝国度支部という役所の依頼を受けて調査を開始しました。関野自身は学問的関心から調査をしたでしょうし、古代史研究において発掘調査は必要ですが、すでに統監統治下であることを勘案するとき、この調査にはいわゆる「任那日本府」の存在を立証する目的があったのかも知れません。ともかくこの調査がきっかけとなって、小倉自身が盗掘を図ったか、あるいはお金になることを知った韓国人が盗掘したものを小倉が購入したかのどちらかであると思われます。1965 年の日韓条約締結のとき、韓国政府はこの冠帽の返還を要求しましたが、日本側（文部省）は個人の所有物であるという理由で返還に応じず、その後の何度かの要求も断り続けています。

博物館側に特別な理由がないなら返せばいいのに、それが無理ならせめて現地で特別展示をすればいいのに、と単純に考えていました。ところが最近、対馬で盗まれた仏像をめぐる韓国側の裁判で韓国の寺に所有権を認めるという判決がありました。倭寇が盗んだのだから韓



国のものだ、という理由でしたが、そうすると、日本の博物館側ではこの冠帽の韓国での展示について慎重にならざるを得なくなるでしょう。ほかにも日本の寺院などには韓国ではもう見られなくなった昔の絵画などが多く所蔵されていますが、それらの管理もいっそう厳しくなることでしょう。信仰の対象としてであればもちろん、美術品として鑑賞する場合も、文化財をめぐるいがみ合うのはそれを愛する人の気持ちにそぐわないことで、何とか相互に譲り合えないものかと願います。

話は変わりますが、韓国には「ウルシニョンスロプタ」という形容詞があります。「昼間は廃墟のようにさびしく、ウルシニョンスロプくて」（黄哲暎）とか、「二、三月は今よりももっと寒くウルシニョンスロかった」（朴婉緒）というように使い、辞書には「ものさびしい、みじめだ、貧しい、うっとうしい」などとあります。このことばは、日本が韓国の外交権を奪い、韓国統監府を置いて内政にも干渉することを定めた日韓保護条約が1905年、すなわち乙巳の年（ウルサニョン）に締結されたことに由来する、そのときのようなみじめで情けない気持ちを表すことばになったと聞いて、絶句しました。現在韓国人はとくに乙巳条約を思い浮かべることなく、このことばを使っているのかもしれませんが、このようなことばが日常化しているところに韓国人の日本に対する恨（ハン）の深さがうかがわれます。

短信

○ 今回から藤田さんに代わり編集担当となりました。至らぬ点が多くあると思います。ご助言、ご指導みなさまからいただければ幸いです。

○ 『第22回潮来交流会 授業・交流会報告書』ができあがりました。日韓の高校生による交流報告、道徳教科化についての報告、韓国の国定歴史教科書問題に関する報告、ヘイトスピーチと関東大震災時の朝鮮人虐殺に関する授業実践報告等、とても充実した内容となっています。まだご覧になっていない方は、右記郵便振替口座に1,300円（送料込み）をお振込みください。

○ 波多野先生の論稿を読みながら、荒井信一『コロニアリズムと文化財—近代日本と朝鮮から考える』（2012、岩波新書）、そして、私の住む街の寺の境内に藤堂高虎が豊臣秀吉の朝鮮侵略時に持ってきた石像があることも思いだしました。

○ 小倉コレクションは東京国立博物館東洋館に展示されています。高句麗、百濟、新羅等に関連する現物が小倉コレクションにあります。
(E)

ウリ107号 2017年2月20日
日韓合同授業研究会

事務局連絡先

E-mail larrabee1991@yahoo.co.jp